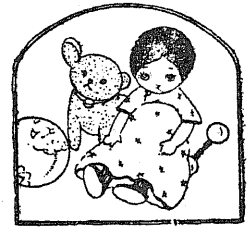

皇孫御養育の御革新

醫學博士　遠山椿吉談

昨年十一月廿六七日東京日日新聞通俗講話欄に掲載せられたものであります。

⊙皇孫御降誕の日近づき、國家を擧げてその佳辰を翹望してゐる折柄、この程新聞紙上にて漏れ承る所によれば、このたび御降誕の皇孫殿下を初めとして、御生母自から御授乳あり、御手元にて親しく御養育遊ばさるゝ事に御治定あらせられたとの御事である。この事を拜聞したる私は、思はず驚嘆しまた歡喜した。その次第は、何時の代からかの御恒例として、高貴の御生誕には、然るべき家柄を選んで御養育を仰せ付けられ、立派な御乳の人をつけて御乳を上げられるのであつた。さるを、このたび永く久しき右の舊例を御改めになつたのは、誠に天地自然の法則に基かれた偉大この上もなき御英斷と拜察したからである。そこで今私が斯く驚喜した理由を、自分の立場である醫學の方面から、少しく說明さして戴きたい。抑々婦女子が妙齡になると、その體内で月々自家榮養に必要な分量以上の血液の製造が起こつて來る。この血液は、將來胎兒の宮殿である所の子宮に輻湊して、胎兒といふ賓客の來るのを待つ

てゐる。併し來客なき間はこの餘分の血液は月々時を定めて體外に排除される。これが即ち月經の潮來であつて、いはゞ將來の姙娠に備ふる生理上重要なる準備の現象である。ついでにいふ、この血液は惡血でもなければ、汚血でもない。尊き純血である。それで月經を「婦人の汚れ」などゝ唱へ、更に神聖なるべき產褥までも不淨事と考へたのは、未開時代の謬想である。さて、一朝姙娠が初まれば、この血液を以て先づ子宮の增大擴張と、胎兒榮養の資にあてられる。即ち宮殿の臨時增築と、殿裡の賓客の御馳走に用立てられるのである。

⊙やがて月滿ちて分娩し、胎兒といふ賓客が立ち去つた後は、この血液は、子宮部には不用となるのでこの方面を引き揚げて初生兒の榮養に缺くべからざる食糧製造所兼寶庫ともいふべき乳房の方へと廻される。この時から臨時增築された宮殿（即ち增大された子宮）の不用の分は秩序よく取り崩されて舊時の規模となる。つまり子宮は平常の狀態に復するのである。一方乳房に廻された血液はその後盛んに乳汁といふ食糧を製造して宮殿を出て、娑婆と名づける旅に上つた桃太郎や、かぐや姫にかれらの消化器の完成するまで、數ケ月の間、日々消化吸收し易く、しかも滋養に富める御辨當を差し出すのである斯くて太郎や姫が齒も生え、普通の食物に堪へるほどに生長した頃になると、乳房の製乳作用も事業縮小をはじめ、これと前後して完全に復舊した子宮の宮殿に血液が戻つて來て、月々の經水となる。斯くして下の宮殿も、上の製造所も、常態に復するのは、生理上の正しき現象であり健全なる人體繁殖の順

序である。若しわれ〳〵が自然の順序に從はず、天則に戻つた動作に出たならば、右の現象がどうなるであらうか。今生れた兒を母の手より引離して、生母の乳を與へず、他の方法によつて兒を養育したとすれば、兒と母の身體とに當然次のやうな異常事件が起こつて來なければならぬ。先づ母體は乳汁の分泌が不用になるから廢用萎縮といふ生理上の原則によつて、乳汁製造が日ならずして停止する。即ち乳があがつてしまふ。さうなれば子宮より乳の方へ廻された血液の供給所を失つて吐け口がなくなつたわけである。その結果、子宮の增築材料であつた血液が行き場を失つて子宮に逆戻りし、そこの增築事業の材料が蓄積鬱滯するため、分娩後の縮小工事を遲延ならしめ、子宮の復常作用を妨げる。

⊙生兒に母乳を與へず、他の方法によつて養育すると、上述の理由により、子宮の復常作用を妨げるさうなると、實際產後の肥立が惡く、收縮不完全にして軟弱な子宮は、色々の原因によつて容易に子宮病を惹起し、續いて諸種の婦人病を誘發する。子宮後屈とか內膜炎とか不娠症とかヒステリーとかいふのは、多くこれである。又乳が早くあがるために、月經の再來も早くなり、姙娠も近くなるのもまた自然である。これ等は皆、授乳といふ天則にそむいた刑罰と考へて宜しい。次に生兒の方にはどんな結果を見るかといふに、自己の生命保續、發育生長に要する大切な榮養物は、胎內で自己の身體を作つてくれた母の血液以上のものの外ある筈はない。したがつてこれで製造せられた生母の乳汁は生兒に對して最上絕好の榮養物であることは何人でも想像に難くないのみならず、母乳はその兒に授かつた神の賜もの

である。兒はこれを呑むべき先天的の權利を持つてゐる。それを暴虐なる母親がこれを掠奪して與へないのは不條理であるともいへる。そは兎も角、母乳の尊むべき理由を生理上から少しく解釋せんに、凡そ完成した人體なれば、その榮養物は咀嚼、消化、吸收、類化と四段の作用を經て身體の組織となるのである。そして最後の類化が最も大切な作用であるから、類化の容易なものほど、それだけ榮養物として價値のある事となる。又一方に人間の血液は、その血族關係の稀釋となればなるだけ血液性質の差異が大きくなる。從つてこれが體内に入つての類化が愈々困難である事は、近時血液學上の闡明する所である。この理論によれば外觀同じ樣に見ゆる乳汁でも、更に化學上に分析して同じ成分と見ゆる乳汁でも、緣の遠い婦人の乳汁と、眞の母の乳汁とは、自から性質の異なることが察せられる。乳汁でさへあればどれでも同一であると考へるのは、微妙なる自然の現象を知らぬからである。

⊙乳汁はその婦人の年齡、體質、分娩の時期等が違へば皆著明の差があることは、すでに明白なる事實である。されば生兒に對しては、生母の乳汁ほど理想的な榮養物はないので、それゆ生母の授乳を止めて他人の母乳を與へるのは、生理の自然にもとる不合理、不適當なる哺育法といはねばならぬ。この理法よりして人乳に代へて牛乳又は他の獸乳を用ゆるは更に不合理を重ぬるものである。いはんや、他の食物、例へば乳粉、小兒粉の類を與ふるにおいては、益々自然に遠ざかるもので、ために生兒の發育生長の上に種々不良の結果を來たし、遂には虛弱に陷らしむる事となる。右の如く生母授乳の廢止は、

母體の上にも、兒體の上にも、甚だ不利なる影響を來たし、進んでは母兒體の將來に恐るべき結果を遺すものである。ゆゑに生母の授乳廢止は「母の現存する以上、母體に一定の疾病があつて、母兒双方に惡影響を來たす恐れある場合に限り、止むを得ず行ふべきもの」との法則によるべきである。然るに世間、殊に上流社會において安逸を貪り、享樂にふけらんがために、これを敢てし、生兒を遠ざけ、養育を怠り、兒を他人の乳母に託するの徒あるを見る。又歐米諸國の母も授乳を親らせず、牛乳を以て之に代へるの惡風滔々として俗をなすといふ有樣、實に自然に反し、天則にもとるの罪惡をさとらざるものといはねばならぬ。さるを、今回わが皇室の御英斷は、たゞに御母子の圓滿健全と皇統不朽の大本を作らせらるゝのみならず、人生々活はすべて科學の理想に基づき、天則を尊ぶべき典範を示され、更に內外無智の徒に生兒哺育法の誤謬弊風を改むべき大敎訓を垂れさせられたものと拜察する。こは草ぼの學究る私一人の驚喜に止まらず、七千萬同胞のひとしく感ずる所であると思ふ。腰折一首以て千古無比の佳例を開かせられたる事をことほぎ奉つる。

天地とともにくちせじあめつちの
おきてふみますわがすべむつは。　（完）